

ジャンル	子ども・教育	日本語学習	医療・福祉	労働	災害対策	意識啓発 地域づくり	推進体制の 整備	その他
事業名	在住外国人の教育支援事業 ～交流型日本語教室と進路ガイダンス～							
団体名	小松市							

******* 事業のポイント *******

在住外国人が社会の一員としての役割を果たしながら自立した生活を送るために…①交流型日本語教室:生活に密着した情報を、日本語を使って提供することで社会への適応力と日本語でのコミュニケーション力を合わせて育成できるサポートづくりに取り組んだもの②進路ガイダンス:子どもの未来を考える。外国人保護者の教育に対する意識高揚。

助成年度	平成 23 年度地域国際化施策支援特別対策事業	事業総額	169 千円
------	-------------------------	------	--------

事業の内容、成果等

●事業実施の背景

本市の外国人在住者(以下「在住者」)は、全人口の約1.2%。近年その数は減少傾向にあるが、日系ブラジル人を中心に、子供を持つ家族滞在者や長期滞在者が増えている。本市の在住者には地域の活動に参加したり、相談役として活躍したりする人も増えるなか、周囲とのコミュニケーション不足でトラブルにつながるケースや、学習や進路の問題を抱える児童・生徒も存在する。

なお、既存事業としては、市役所内における手続きに関する翻訳・通訳サービス、ポルトガル語広報誌発行、庁内連絡会の実施(関係課連携、職員対象の講座開催など)、各種国際交流イベント開催、帰国・外国人児童生徒を対象とした日本語・教科学習の支援のほか、小松市国際交流協会の協力により、日本語教室、相談員設置、翻訳・通訳ボランティア登録、多文化共生モデル町内会事業などを実施している。

●事業内容

日本語教室開講の場となっている小松市国際交流協会(以下「協会」)は、独自の事業として各種イベントも開催するため、在住者の情報交換の場で、同時に彼らの生の声が集まる場所となっている。在住者のニーズをくみとって必要なサポートづくりをするために、当協会の協力を得て下記の2事業を実施した。

1. 交流型日本語講座

(1)経緯 「学習者のニーズにあった日本語学習支援ができていないか？」—まとまった学習時間の確保が難しい学習者が多く、在住者の地域参画や職場でのコミュニケーションなど、日常生活で使える日本語へのニーズは高く、従来の積み上げ式の継続的なカリキュラムでは対応が難しい現状があった。そこで、社会に参加するための、生活で使える日本語を学べる教室づくりの実践として、「交流型日本語講座」を開講した。

(2)内容「どんな場面でどんな日本語が必要か」、「日本で生活するうえで、どんな日本のルール・文化を知っているとよいか」という視点から、日本語講師陣とともに講座内容や教材の検討を行い、下記の教室/講座を開講した。

①交流型日本語講座「生活のための日本語教室」



時 期:10月～12月(週1～2回) 全12回

講 師:協会に登録している日本語講師陣、市民サポーター

毎回、場面設定(薬局で症状を伝えて薬を買う etc)をし、目的達成のための日本語を練習すると同時に、日本のマナーや生活に関わる仕組みを学べる講座として実施。

②交流型日本語講座「食育講座」



時 期:6月、10月各1回

講 師:小松市健康推進員(市民ボランティア)

油分・塩分控えめの日本食の調理を教わりながら日本語を学べる講座として実施。自国の調理法でやりくりしている在住者が多いため、本人や家族の食と健康についても考えてもらえるよう、栄養についての講義も合わせて実施。

③交流型日本語講座「パソコン教室」



時 期:1、2月(全10回)

講 師:協会会員

地域活動に参加する在住者が増える中、日本語でワードやエクセルを使うことに慣れていないために、日本人と協働するにも資料の作成がうまくできない現状がある。これを解消し、住民の一人としてさらに知識や能力を活かしてもらうため、初級パソコン教室を開講。

(3)成果と課題

- ・従来とは異なる教室づくりということで、準備段階から戸惑いや困難も多かった。その一方で、「行きたかったお店で買い物ができた」「初めてひとりで病院に行けた」など、実生活で活かせたという声は講師陣にとって大きなやりがいとなった。
- ・冬が近づき天候が悪くなるにつれ、バスに乗って教室に来るにはどうしたらよいかという声が出てきたため、バスの乗り方講座を開催した。講座を開催する中で様々な新しい意見が聞け、生活に必要な情報をどんどん増やせるよい講座を展開できた。
- ・本市の外国人在住者数はブラジル国籍が約4割を占める。本講座も、日系ブラジル人の参加者が多かった。しかし、タイやフィリピン出身者の参加があった講座もあり、日本語で教える教室は母国語を問わず対応できる点がよかった。
- ・日本語を教える分野に携わっていない人が先生になる講座もあり、いかに”伝わる日本語”で指導できるかが問題となった。これは、在住者の日本語向上だけでなく、日本語を母国語とする者の側にも「やさしい日本語、伝わる日本語」を知ってもらうことの重要性を改めて確認する機会となった。また、一般の小松市民が実施した講義では、教室で聞くことのない、地域の日本語にも触れる機会ともなった。
- ・問題点として、毎回固定のメンバーでなかったこと、日本語レベルの違い、講師同士の打合せ・準備時間の確保が挙げられた。日本人参加者がもついてもよかったのではとの声もあった(特に食育講座)。
- ・今後、従来の日本語講座にどのように生活に必要な日本語の要素を取り入れていくか検討しなければならない。

2. 進路ガイダンス

(1)経緯 本市では、帰国・外国人児童生徒を対象とした日本語・教科学習の支援を行うための教室を市内小学校に設置している。この学校が拠点校となって、保護者を交えた説明会や発表会など企画・運営し、保護者への情報提供や教育に対する意識高揚に努めてきた。

しかしながら、「いつか母国へ帰るから必要ない」「日本語が分からない」という保護者の状況があり、子どもたちが日本に残ったとしても、両親の母国へ帰ったとしても、進学・就職において問題に直面することが明らかになってきた。

子どもの様子を見ながら保護者が子どもたちとともに将来設計を立てるのが理想的であるが、まず子どもたちの教育にかかわる現状を保護者が把握し、考え、現状で可能な限りの教育を受ける(受けさせる)啓発の試みとして、進路ガイダンスを開催した。

(2)内容 小中学生を持つ外国人保護者とその子どもを対象に、市内の高校2校(普通・芸術コースのある市立高校と県立工業高校)の協力を得て開催。進路について親子で考える機会として、現役高校生や、両親の都合でブラジルと日本を行き来することになった先輩の経験談など、身近な実例をもとに考える場を盛り込んだ。



- ・ブラジルと日本の教育の違い
- ・高校はこんなところ！(在校生のはなし)
- ・先輩の体験談
- ・進路ガイダンスQ&A(市教育委員会)
- ・校内見学(市立高校、工業高校)
- ・交流会(児童生徒・大学生・教師・保護者 etc)

(3)成果と課題

- ・学校を実際に見ながら説明を受け、そこに通う生徒の話を聞くという、普段できない体験スタイルで、子どもたちと保護者の両方の興味関心を引き出すことができた。工業高校と、普通科と芸術コースのある市立高校の2種類を見学することで違いも見ることができ、専門性の高さに驚いたり、魅力的に感じたとの声もあった。
- ・保護者からは、学費や学力の面についての心配が集中した。子どもからは「これから頑張って勉強して、行きたい高校を真剣に考えたい」という言葉ももらった。先輩の経験談を交えることで、これからの生活に密接に関わる問題として親子で考えてもらう機会となった。
- ・今回、学校や教育委員会、協会、先輩として参加してくれる在住者の協力があったことができた。主催者・協力者側にとっては、保護者や子どもたちの不安や疑問を直接耳にする良い機会であり、これからも、この協力体制を継続・充実させていきたい。



●まとめ

- 1 在住者にとって「日本語学習」は、日本語自体の勉強だけでなく、生徒として、親として、働く者として、それぞれの生活に即したニーズがあるということに改めて気づききっかけとなった。
- 2 助成対象となった事業は、行政主体で実施されるものであった。しかしながら、在住外国人の生活背景の複雑化や社会全体の多様化に対応するには、行政主体の取り組みだけでは限界がある。在住外国人が集う国際交流協会のような団体や、教育の現場である学校、在住外国人が多く住む地域が主体となった取り組みに、どのように行政が連携・コネクしていけるかが重要になってくるのではないかと感じている。